

未来へつなぐ 平和の願い

■問合せ／総務課総務担当 ☎ 22-5111



長崎駅前。この日、長崎での経験を胸に米沢へ帰りました。

平和都市宣言事業の取組として、本市中学生の代表8人が長崎市を訪れ、原爆資料館での学習や平和祈念式典への参列、被爆建造物の見学などを行いました。

平和の大切さを肌で感じてきた中学生の声を紹介します。

平和を願って

第一中学校 平 明星

一瞬にして人々の命と幸せを奪った一発の原爆。今あるこの生活がどれだけ尊いものなのか痛感させられた3日間でした。

被爆建造物や原爆資料館で見た、その当時の恐ろしい光景に、とても胸が苦しくなりました。平和祈念式典に参列し、世界中の人々の平和への願いを改めて感じました。平和には千羽鶴を折るときのような、強い思いや力が必要です。今回学び、体験したことをより多くの人に伝えることで、世界平和の実現のために貢献したいです。

真実を語り継ぐ

第二中学校 渡邊 悠斗

なぎ倒された木々やがれきの山となった住宅、苦しむ被爆者の方々の姿など、思わず目を背けたくなるような写真の数々。それ

らすべてが核兵器の恐ろしさを物語っていました。

この長崎訪問は多くのことを学んだ有意義なものでした。現在、被爆者の平均年齢は81歳となり、戦争の悲惨さを知る人はとても少なくなりました。だからこそ漠然とした情報ではなく、平和の本当の意味や戦争の真実を語り継ぎ、恒久平和の実現につなげたいです。

次世代へ語りつぐ

第三中学校 齋藤 千尋

今から72年前の8月9日、長崎市に原子爆弾が投下され、一瞬にして町が失われ、人々の命が奪われました。当時の様子を見たとき、言葉にできない、伝えられない思いが込み上げてきました。

戦争体験者が少なくなってきた今、私たちは原子爆弾の悲惨さを忘れることなく、次世代へ語り継いでいかなければならないと実感しました。この訪問で学び、

長崎訪問記

平和祈念式典

式典には、国内はもとより世界各国から数多くの人
が参列し、原爆で尊い命をなくされた犠牲者への祈り、
平和への誓いを行いました。式典終了後、多くの参列
者が会場中央にある平和祈念像を前に参拝し、平和へ
の思いを新たにしていました。

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

ここは長崎の原爆によって亡くなられたすべての犠
牲者の冥福と永遠の平和を祈るためにつくられた施設



▲手記の朗読に聴き入る中学生

で、178冊の原爆死
没者名簿が収められ
ています。追悼空間
では、ボランティア
による被爆者の手記
の朗読が行われまし
た。

長崎原爆資料館

資料館には1945年8月9日の11時2分で止まった
時計など、1500点以上の資料が展示され
ています。資料の中には目を背けた
くなるような悲惨な展示物もありまし
たが、中学生たちは真剣な面持ちで学
んでいました。



原爆投下の時刻で止まった時計▶



▲(上) 平和祈念像。平和祈念式典はこの像を前にして行
われました。(下) 式典終了後、原爆によって亡くなられた
犠牲者へ深く祈りを捧げました。

感じたことを一人でも多くの方に
知ってもらえるよう、自分から伝
えていきたいと思っています。

もう二度と

第四中学校 佐藤 凌輔

僕は、長崎に滞在した3日間
を通して、原爆の恐ろしさや本
当の平和について学びました。
1945年8月9日11時2分、一
瞬で7万人以上の人々が生命を奪
われ、かろうじて一命をとりとめ
た人々も心と体に生涯いやなこと
のできない傷を負いました。資料
館で見た当時の光景は、目をおお
いたくなるほどのものでした。
終戦から72年経った今、こうし
て生活できることに感謝し、二度
と戦争が起こらないよう今回学ん
だことをみんなと共有して、原爆
への理解を深めていきたいです。

本当の「平和」とは

第五中学校 濱田 好花

「平和」それは二度と戦争が起
きないこと。世界から核兵器がな
くなること。長崎訪問での3日間、
原爆投下について、また、平和に
ついて、たくさん学ばせていただ
きました。

平和祈念式典に参列して、被爆

者本人からのお話を聴いたり、原
爆資料館で被爆した品々を見たり
しました。一発の原爆で何万人も
の方々が亡くなりました。当時の
様子を見て、とても心が痛みまし
た。今回学んだことを、より多く
の人に伝え、平和を願う人を増や
したいです。

平和な時代が

続くために

第六中学校 菊地 唯人

今回の3日間の長崎訪問で、改
めて原爆の恐ろしさを知り、長崎
の人たちの平和への強い思いを学
びました。長崎の町が一瞬にして
白い閃光と共に火の海となったこ
とを考えると、無差別に何もかも
破壊する兵器は二度と使ってはい
けないと思います。

原爆の被害を語り継ぐ人たちが
少なくなった今、自分たちの世代
が様々な人たちに伝える番です。
僕は、様々な場面で今回体験した
ことを伝えていき、これからも平
和な時代が永遠に続くようにして
いきたいです。





永遠に伝える

第七中学校 大場 真実

原爆投下から72年。今回実際に足を運んでみると、そこには想像を絶するものがありました。原爆によって一瞬にして奪われた命、生き残ったとしても病魔に苦しめられる生活。資料館にはこれらを物語るものが多くありました。改めて戦争の悲惨さを深く感じました。そして、この8月9日の出来事をおろそかそうと片づけるべきではないと思いました。そのため、自分の口で今回目にしたもの、肌で感じたものを伝えていきたいと思っています。

恐ろしい過去

南原中学校 武田 尚汰

半壊した神社の鳥居、家が全壊して辺り一面が地獄と化した写真。僕はこの長崎訪問で、原子爆弾の恐ろしさを改めて知りました。また、被爆された方々の体験などを聞いて、何の罪もない多くの人が、爆風や放射線などによって亡くなられたことを知りました。思わず目を背けたくなる場面も多数ありました。僕は、これらの体験をより多くの人に知ってもらい、平和の大切さをみんなと共感できるように、たくさんの人に伝えていきたいと思っています。

【写真の解説】

①長崎で現存する数少ない被爆施設（旧城山国民学校校舎）を平和案内人に案内してもらいました。隣には現在の城山小学校校舎があります。②平和祈念館の平和情報コーナーで、被爆者の証言や被爆医療情報などを閲覧しました。③核兵器廃絶と平和な世界の実現へ願いを込め、署名しました。④長崎で学んだことを振り返り、自校の全校生徒に伝えました。（七中）

長崎から

「平和のバトン」をつなぐ

本市が加盟する日本非核宣言自治体協議会で主催する「親子記者事業」に、今年度は本市の梁澤大翔さん（愛宕小）・香代さん親子が選ばれました。二人は8月8日から11日までの4日間、長崎市で記者として「被爆72周年、平和のバトンを長崎から次の世代へ」をテーマに平和祈念式典への参列や被爆者の取材などを行いました。ここでは梁澤さん親子の感想を紹介いたします。

平和について学んだこと

今回、親子記者に参加して、全国各地から参加した親子さんたちと平和についてたくさん学んできました。

私が一番印象に残っているのは、被爆者である松尾さんのお話でした。戦争の現状がわからないまま行った私たちにとって、ものすごく衝撃的なお話ばかりでした。

長崎に原子爆弾が投下された当時、松尾さんは11歳。山小屋に逃げたそうです。周りは死体

だらけ…もがき苦しむ人を目の前にして、薬も燃えてなくなり助けてあげることができなかつたそうです。

原爆資料館でも、当時の状況を写真や現物で見えました。原爆投下の11時2分を指したままの時計：熱で溶けたガラスと一体になった人の手の骨：言葉が出ませんでした。

今回の親子記者では、「平和」は当たり前ではないと考えさせられました。この学んだことを帰ってすぐ家族に伝えました。原爆の恐ろしさを知らない人たちにも伝えていきたいです。



▲梁澤香代さん・大翔さん親子

梁澤さん親子が作成した「おやこ記者新聞（第10号）」は日本非核宣言自治体協議会のHPに掲載されていますので、併せてご覧ください。